

マレーシア・アロースターの 日本軍将兵の慰霊碑 華僑系団体が撤去要求

川島 順 予科21-7
(越谷市) 航空7-1

はじめに：

2019年4月1日の朝日新聞デジタル版には、マレーシア・アロースターの日本軍将兵の慰霊碑を撤去する抗議運動が起きていることを次のように報じている。『かつて日本の占領下にあったマレーシアで、地元政府が旧日本軍将兵の慰霊碑に添えた説明文をめぐり、激しい反発が起きている。日本政府の財政支援を受けて慰霊碑を修復した際、将兵を「英雄」とたたえたためだ。旧日本軍による犠牲が多かった中華系の団体は今週にも日本大使館を訪れ、撤去を求める方針だ。

この慰霊碑は北部ケダ州の州都アロースターにある。戦いの要衝だった橋の爆破によって戦死した旧日本軍の将兵らを追悼するため、1941年に建設された。長く破損したまま放置されていたが、日本のペナン総領事館からの財政支援を受け、地元政府などが修復。本年3月21日に落成式が行われた。

ところが、慰霊碑の横に、将兵を「英雄」とたたえる説明ボードが設置されたことで、地元で非難が沸き起こった。マレーシアでは戦時中、中華系を中心に多くの住民が旧日本軍に殺されており、地元メディアは「侵略軍がなぜ英雄なのか」などと連日報道。華人団体や野党が抗議行動を繰り広げた。ナジブ前首相もツイッターに「慰霊碑はすべてのマレーシア人への冒瀆だ」と投稿した。(以下略)』と報じている。

この記事を見たフリージャーナリストの佐波優子さんは、

その真偽を確かめるべく現地におもむき、慰霊碑及び説明ボードを確認し現地の人の話を聞き、次のような投稿をフェイスブックに寄せている。



佐波優子さん



アロースターの慰霊碑とそれを囲む
反対運動団体のプラカード

なお、説明ボードは既に撤去され、その写真がマレーシア歴史博物館に展示されている。この説明ボードは下記の写真のように、左よりマレー語、日本語、英語の3つのボードよりなり、英語、マレー語の内容は日本語の内容とかなり違った内容になっているとのこと。



慰霊碑の説明ボード

1. 佐波優子さんの主張

以下佐波優子さんの主張の要旨を次に紹介します。

日本人将兵の慰霊碑についての報道記事を取り上げました。私がこのテーマを選ん

だきっかけは、マレーシアに建立された旧日本軍将兵の慰霊碑に添えられた説明文に「英雄」という言葉があることに激しい反発が起きている、という報道に心を痛めたからです。

11. 説明ボードの内容

説明文にはどんな言葉が書かれていたのでしょうか？そんなに日本軍将兵を褒め称えるような文章だったのでしょうか？実際の文章を探してみました。するとマレーシアの歴史博物館が慰霊碑の説明ボードの写真を載せていたことが分かりました。説明文は日本語、英語、マレー語の3種類で書かれています。以下が慰霊碑に添えられていた日本語の説明を写真を見て手打ちしたものです。日本語のボードには

「ジットラ堅陣を突破後、アロルスター道を突破した日本陸軍部隊の中に、渡辺部隊朝井小隊のオートバイ挺身隊の大きな活躍があった。

英軍は、日本側の進撃途上の数々の橋梁に爆破装置を施して、前進を阻止していたが、この強硬突破に朝井肇中尉の指揮するオートバイの一隊が活躍するも戦死を遂げた。

朝井小隊の戦闘経過は次の通りである。

マレー東海岸に上陸した渡辺部隊は十二月十二日、英軍の誇ったジットラ付近の堅陣を突破するや、直ちに快速オートバイ部隊である朝井小隊にアロルスターに急進させた。先遣の命を受けた朝井小隊長以下快速オートバイ部隊は、十三日午前九時四十分ジットラ南方二キロの地点を出発し、ジットラ、ケバラバタス、アロルスター道を一路アロルスターに向かって進軍した。

この時英軍は、アロルスター北方地区に一部の兵力を残置して日本軍の来攻を阻止せんとしたが、朝井隊はこの英軍の中を突破し、同十時十分には確保を命ぜられた橋梁に到達、橋梁南側の三百の英軍は、これを見るや不意に掃射を浴びせて来た。

朝井小隊長は金子、中山両伍長に命じて橋梁南側の英軍の陣中に乗車突進させ、一方岡田上等兵をしてこの状況報告のため本隊に帰らしめ、自分も兵二名を率いて橋梁爆破の導火線を切断せんと弾雨下を橋梁目指して突進、導火線をまさに切断しようとするや、この時早くも英軍はスイッチを入れたため、轟然たる音響の中に橋梁もろとも朝井小隊長以下三名は壮絶極まる戦死を遂げた。

これを知るや金子、中山両伍長はひるまず、小隊長の命令に従って英軍陣に突入、数名を倒したが、英軍が多勢のため中山伍長は戦死、金子伍長は重傷、しかも生き残った五名の勇士は死闘を続けたが、戦車四両をもつ百名の英軍から背後攻撃をうけ、破壊橋梁北側で力闘し、英軍の戦車一両を焼き払い、遂に五名は壮絶な戦死を遂げた。

しかしこの朝井隊長以下前記兵士の犠牲によって、英軍を壊乱させ、橋梁東側の鉄道橋の確保を容易にして、松井部隊の以後の追撃を有利にするに至った。

(要約引用：大東亜戦争史 マレー作戦 朝日新聞社発)

12. なぜ日本軍将兵を英雄視したか

以上が説明文に書かれていた言葉です。1941年に日本軍がマレーシアに入ったころ、イギリス軍がいる橋梁を突破しようとした日本軍将兵数名が戦死した時の様子が記されています。私には、この文章が「英雄を讃えている」ようには感じませんでした。戦死した将兵を追悼している文章だと感じました。慰霊碑とは、慰霊や追悼の目的で建立されるものだと思うからです。それに、この日本語の説明文には、勇士や活躍という言葉はありますが、問題となっている「英雄」という言葉はありません。それなのになぜ、地元の人には「英雄」という言葉に抗議をしているのでしょうか？

その理由は、英訳文の方にありそうです。

英訳文のほうには、日本語原文にはない、「History of Three Japanese Heroes Who Conquerud (原文ママ) The Alor Setar Bridge」というタイトルが付けられています。この中の「Heroes」という言葉が、報道されている「英雄」なのでしょう。またマレー語の説明文では、タイトルは「SEJARAH TIGAWIRA JEPUN MENAWAN JAMBATAN ALOR SETAR」となっており、これは順にSEJARAH「歴史」TIGA「三」WIRA「英雄」JEPUN「日本」MENAWAN「魅力的な」JAMBATAN ALOR SETAR「アロースターの橋」という訳がつくため、略々英文のタイトルと同じで、本文の方も略同じ内容です。

そう考えると、英訳およびマレー語訳した際に日本語原文にはなかったタイトルがつき、そこに「Hero」「WIRA」と加筆されたことが、この騒ぎの発端になったのではないかと思えます。原文にない言葉が付くなんて、ヘンですよ。

13 当時の原住民の心情

先ほど、アロースター日本人慰霊碑への抗議の報道について書きましたが、もう少し続きを書きます。先ほどのフェイスブックには、マレーシア・アロースターに建立された日本人将兵の慰霊碑につけられた説明文に「英雄」という言葉があったということで現地の人から抗議の声が上がっている新聞報道について書きました。

この報道記事を見たとき私は、戦争当時のマレーシア人が日本人のことをどう見ていたのか知りたくなり、過去の色々な新聞記事を探してみました。そして1941年(昭和16年)12月30日の朝日新聞夕刊に載った、「ケダールの摂政閣下悲憤の涙 忍ばれぬ英の強厭 記者の手を握り「日本を信頼」」という記事を見つけました。「マレー北部要塞にて酒井特派員廿八日発」とい

う一文が添えられているので、記者は酒井さんという名前の人だと思います。

記事はこういう情景描写から始まっています。当時の言葉は難しいので、現代語にしながら書き写していきます。1941年、戦争が始まった12月のこと。マレー西海岸の、イギリス領であるケダール王國に日本の皇軍が進駐すると、イギリス人達は素早く脱出してしまいました。けれど現地の住民は、大部分のインド人と中国人と共に踏みとどまって、日本の皇軍を信頼し積極的に協力を申し出た、と。そして街には「支持南京政府」(注：昭和15年に蒋介石と決別した汪兆銘が北京―漢口を結ぶ京漢線以東、上海地区以北の日本軍占領地区を支配する親日政府を樹立、和平軍と称されていた)刊行や「協力日本軍」などの傳單(チラシのこと)が日の丸と共に各戸に貼られ、新秩序建築の波は滔々とケダール王國を流れつつあった。と記事にはそう書かれています。戦意高揚のために新聞記事には良いことばかり書かれていたということを加味しても、この当時、現地の人には日本軍には好意的だったのではないかと思える情景です。

そんなとき、記者・酒井さんは現地の摂政であるマハマ・チュウワさんの私邸に呼ばれました。家はアロースター街外れの、森に囲まれた細やかな一軒家だったそうです。酒井さんが到着し、ドアを叩くと一人の男性がドアを開けて出て来てにこにこ出迎えます。酒井さんが応接間に入ると、そこには沢山の日本の寫眞が貼られていました。そしてマハマ・チュウワ殿下は流暢な英語で、酒井氏にこう語ったそうです。

「貴下は私のいふことを信じないかも知れない。しかし私は神に誓って申しあげる。私は日本軍を絶対に信頼してゐる。私はすでに二、三度英軍に留學したが日本の土は一度も踏んだことはない。その私が英國に

反対してゐるのだ。英國は長い間我々を圧迫し続けてきた。それは到底理性ある人間の耐へ得る程度のもではなかった。英人は、我我を下等な民族であると見る根本的に謬った考へ方から出發しているのだ。私は日本軍と協力したい気持ちは同じ東洋民族であるといふことから説明し得る」と。そしてマハマ・チュウワ殿下は立ち上がって、背後にかけられたマレー大地図を指差してこう続けました。

「御覧なさい。シンガポールまで続く諸々の天國は結局は同じ宿命に泣く同じ民族なのです」「私は思ふ、いまこそ民族の夜明けが来たのだ、貴君さへ、ささやかなこの王室を激動に來たではないか。さあ、手を握りませう」と。そして酒井記者が帰る時、チュウワさんは二、三人の従者と共にいつまでも見送っていたのだそうです。

記事はここで終わっています。私はこの記事の中で、チュウワさんが日本を信賴している心情を酒井記者に語りかけるシーンに胸打たれました。この当時のマレーシアには、日本に対してこうしたことを考えていた摂政がいたのです。そして、2019年の現在、アロースターにある日本人将兵の慰靈碑にあのような抗議が起こる今だからこそ、1941年当時の現地の人が、日本のことをどう思っていたのかを知ること大事なのではないかと、私はこの戦時中の新聞記事を読んで思いました。』

あとがき：

アロースターの3人の日本軍将兵の慰靈碑の記事は、マレーシアの地元紙でも多数取り上げられているが、殆どが朝日新聞及びマレーシア中華協会がバックになっているスター紙の記事に同調して、戦時中、中

華系を中心に多くの住民が日本軍に殺されており「侵略軍がなぜ英雄なのか」と報道している。

慰靈碑の日本語ボードの戦闘経過は朝日新聞の作成した大東亜戦争史を引用しており、佐波さんが紹介したジュウワ殿下との対話も朝日新聞の特派員の記事である。このように戦時中は軍の広報を一手に引き受けていた朝日新聞が戦後は手のひらを返したように大衆に迎合し、軍および日本の歴史を貶す記事を垂れ流している。このように節操のない新聞社はジャーナリストとしての資格はない。

一方、スター紙の報道は偏見に満ちているというブログや、昔からマレーシアにいるチャイニーズは慰靈碑の設置に反対していない、後から入ってきた大陸の中華連中が運動を起こしているのだとマハティール首相の側近から直接聞いたというブログ等、反対意見も多数見受けられる。そういえば日本の各地の中華街でも同じような問題が起こっている。

また、問題の慰靈碑の英文及びマレー語のボードは、日本語のボードと大きく内容が異なっている。日本語のボードでは将兵を3人とは限定していないし、山下将軍が感状を授与したことに触れていない等、明らかに日本語のボードを翻訳したのではなく、独自の目線で作文している。おそらく日本に好意を持つ現地の人がマレー語の原稿を作成し、それを英語に翻訳したのではないかと推測される。佐波さんが紹介した当時の現地人と同じような日本に好意を持つ人が今でも沢山いるのではないかと期待する次第である。